

HANDS next

【ハンズネクスト】

とちぎ多文化共生教育通信

News Letter
"HANDS next"

vol

2

発行：「宇都宮大学 HANDS プロジェクト」研究チーム

※『HANDSnext』は2007年より発行された宇都宮大学特定重点推進研究グループ通信『HANDS』をリニューアルしたものです。

日本に住むタイの子どもの未来のために ～タイ日・日タイの中学校教科書単語辞典を編纂、この秋に刊行予定～

宇都宮大学非常勤タイ語講師 泉田スジンダ

≫ 今回『中学校教科書単語、日タイ・タイ日辞典』を作成したいきさつをお話いただけますか。

泉田：私が栃木県に来たのは1981年ですが、83年ごろから、いろんな問題を抱えるタイ人と接するようになり、「アジアの問題を考える会※1」を立ち上げました。しかし90年代前半ころから子どもに関する問題が出てきました。

≫ 具体的にはどんな問題があったのですか。

泉田：子どもの問題です。在日タイ人女性のお産のこと、子どもの出生届けに関して、子どもの国籍の問題、入学や勉強など子どもに関する様々の相談が増えました。

≫ 複雑ですね。

泉田：そうですね。特にタイの子どもの問題は他の在日外国人の子どもの問題と少し違う背景にあるかもしれません。在日タイ人の子どもは3つのパターンがあります。まず、両親のどちらかがタイ人、どちらかが日本人の場合。次に両親ともタイ人で子どもは日本で生まれた場合。そして両親ともタイ人で子どももタイで生まれた場合です。一番のパターンは、問題はあるけど片親が日本人ですから、家庭で日本語を話す機会もあるし学校でもそれなりについていけると思うんですよ。また2番目のパターンも、両親はタイ人ですが、日本で生まれ育っているので日

本語の知識や文化は外部からある程度得ることができます。しかし問題は3番目のパターンです。両親がタイ人で本人も途中から日本に来ているので、日本語の習得がとても困難です。さらに来日時期が子どものアイデンティティー形成の時期にぶつかってしまうと、精神的にも不安定になってしまう可能性があるのです。初めは、1、2番のパターンが多かったんですけど、3番目がどんどん増えてきて…。

≫ 3番目の子どもたちは、つまりタイで生まれて、途中で日本に来る子どもたちですね。

泉田：そうですね。親が結婚して日本で生活をはじめますが、それ以前にタイにいた子どもを呼び寄せるケースが増えました。この子どもたちは、年齢は様々です。小さい子もいれば十代の子どももいます。この子どもたちは、日本に来て学校に入ります。全く日本語がわかりません。子どもも大変、先生も大変です。

≫ 子どもたちは大変ですね、学校ではどういった支援があったんですか。

泉田：宇都宮市教育委員会に外国人の子どものための支援制度があります。毎週2時間、特別な指導員が学校に行って、子どもたちが学校になじめるように支援しています。ここでは特に早く日本の生活に慣れるように日

本語教育が中心に行われます。しかし、子どもたちはようやく日本語を覚えても、教室の勉強になるとついていけません。特に抽象語が多くなる高学年の子どもにとって、学習言語はとても難しいです。そんなとき宇大でタイ語を学んだ卒業生の一人、大畑美優紀さんが宇都宮市の小学校に指導員として通い始めました。大畑さんはそこで外国人の子どもたちの教育問題を実感したようです。私たちは、何とか子どもたちの勉強を手伝いたいと思い、デック学習室(以下「デック」)※2を立ち上げたんです。立ち上がってから、7、8年がたちますが、その間宇大でタイ語を勉強した学生が継続して指導に関わってくれました。

≫ デックの活動を通してタイ語辞書を思い立ったのですか。

泉田 思い立ったというより、必要に迫られたというのが正直なところ。デックが始まったところ、私が代表をしている「アジアの問題を考える会」のほうにある相談が来たんです。ある山間の中学校にタイの子が入学したが、全く日本語ができなくて困っているというんです。そこでしばらく「アジアの問題を考える会」のボランティアの方に行ってもらうことにしたんです。しかし、そこは宇都宮からですと電車とバスを乗り継いで片道2時間以上もかかる場所なんです。勉強は毎日進んでいくわけですから、支援も限界です。そこで教科書の単語をタイ語に翻訳した辞書があれば、子どもにも先生にも役に立つのではないかと思ったわけです。

≫ でも当時まだタイ語辞書は完成していなかった。その子は結局どうなったんですか。

泉田 アジアの問題を考える会の人々が月に何度か指導に行ったり、その子の母親にお願いしてできるだけ時間のある時は宇都宮に連れてきてもらうようにしてデックのメンバーに勉強を見てもらいました。

≫ 今どうしているんですか。

泉田 その話は、なぜ私が今これ(タイ語の辞書)を必要としているかというもう一つの理由に関わってきます。彼女は中学校に通っていま

した。中学校はいわゆる義務教育ですから、なんとか卒業させるわけですよ。そして卒業後なんとかA高校に入学したんです。しかし長くは続きませんでした。何人もの外国人が高校に入学しても卒業できないのです。

≫ 入ったとしても、結局ついていけないわけですね。

泉田 今まで何人もね。だから私はこの辞書を作らなくてはならないと、もっと気持ちを強くしたわけです。つまり中学校卒業できても、高校入ったときに基礎がまだできないんですよ。だから結局高校に入学しても卒業して、成功する子はなかなかいないんです。他の外国籍がどういう問題があるかちょっとよく分からないけど、タイの国籍の子に関しては一番の問題はそこなんですよ。いわゆる、もう将来は見えるんですよ。もし、教育のとききちんとしなければ、将来はもう見えるんです。

≫ いい仕事にも就けない。

泉田 就けない。そして学校をやめてしまうと変な方向に行ってしまうことも多いんです。だから早く手を打たないといけないと思ってんですけど、そのために義務教育のうちから基礎をきちんと作らなければならないと思っています。

≫ それがタイ語の辞書を作ったもう一つの動機となったわけですね。

泉田 そうです。でもそれだけじゃないんです。子どもたちを見ていて、何もしなかったら将来こうなると分かっているのに、なにもしない自分をすごく責めたくなる時があるんです。だから、今回この辞書を完成させたということは、一つは自分のためでもあるんです。

≫ 心にも引っかかっていたことを、一つやったということですね。

泉田 そう、心に引っかかっていた。だから誰のためじゃなくて自分のためなの。自分の楽のためなんですよ。

≫ そうですか、分かりました。

泉田 最後にちょっと言わせてください。この辞書を作成する過程には膨大な時間とたくさん

の学生の協力がありました。中学校で使っている3種類の教科書を調べて使用頻度の高い単語を選ぶ作業はほとんど学生がやってくれたんです。また、この辞書を実際の形にするために協力してくれた宇都宮大学HANDSプロジェクトの田巻松雄先生に心から感謝します。この辞書は栃木県の中学校で学んでいるタイ人の子どもたちと指導をしている先生方のお役に立つと思います。是非、活用してください。



【泉田スジンダ先生プロフィール】

昭和51年にタイ国タマサート大学経済学部大学院修士課程卒業後、国連ADI（アジア開発機構）就職。その後東京大学大学院農学部研究科博士課程を経て、平成6年より宇都宮大学国際学部（当時は教養部）非常勤タイ語講師として現在に至る。昭和59年より「アジアの問題を考える会」代表、栃木インターナショナル・ライフライン相談員を務める傍ら、教育委員会や地域団体等での講演も精力的にこなす。

》今日は本当にありがとうございました。

（聞き手： 矢部昭仁）

- ※1 アジアの国が抱えている貧困や差別などの問題を学習しながら、真の国際理解を図ることを目的に昭和60年に発足。現在、タイの小学校への支援などを中心に活動している。
- ※2 宇都宮大学でタイ語を学んだ学生が作るサークルのこと。毎週土曜日の午後、宇都宮市在住のタイ人児童生徒に日本語や教科学習の支援をしている。



グローバル教育とフェアトレード

大学院国際学研究科博士後期課程
国際学部多文化公共圏センター研究員

根本 久美子

第二回グローバル教育セミナー報告

「グローバル教育と地域の生活 ～フェアトレードから地域を考える～」のテーマのもと、第二回グローバル教育セミナーが、2010年7月3日、宇都宮大学の大学会館において開催された。今回のセミナーは、宇都宮大学国際学部多文化公共圏センターと、宇都宮大学平成22年度特別経費プロジェクト「グローバル化社会に対応する人材養成と地域貢献」（HANDSプロジェクト）の共催で、大学関係者のほか、学生、市民ボランティア、フェアトレード関係者等の協力のもと開催に至った。

今回は、グローバル教育のテーマの中から、「フェアトレード」を取り上げ、現在のグローバルな問題が、地域の人々の生活にどのような影響を与えているのかを問題提起することで、グローバルな問題と

自分たちの地域のつながりについて身近なところから考え、かつ、自分の生活の在り方を見直したりするきっかけを、地域の人々や学生たちに提供することを目的とした。

セミナーは、オープニングとワークショップ、フェアトレードカンパニー（株）の高須花子氏による「フェアトレードがもたらす地域・市民力の活性化」についての基調講演、フェアトレード関係者によるパネルディスカッション、そして、学生たちによるファッションショーという、四部構成でおこなわれた。講演及びパネルディスカッションに、宇都宮大学の学生NGO団体によるワークショップとファッションショーが加わったことで、出席者は、体験型・参加型学習に参加したことになった。そのため、今回のグローバル教育セミナーは、声高に叫ぶことなく自